

### 春を告げる植物たち！

3月に入ると暖かい日も増え、春がもうすぐそこまで来ていることを実感します。私も含め、スギ花粉症の方は、これからしばらくの間は山々からやってくる黄色い悪魔に悩まされることとなります。このように植物の活動が活発化するのも春の特徴です。

2月くらいから、草地にはよく目立つ小さな青い花が咲き始めます。これはオオイヌノフグリといいます。他には、ぺんぺん草で有名なナズナや、全体が赤紫色っぽくみえるヒメオドリコソウなどが咲き始めます。その他には誰でも知っている春の野草の代名詞であるタンポポ（このあたりではほとんどセイヨウタンポポ）が咲き始めるのもこの頃です。これらが、咲き始めて少しすると河原にはツクシが芽を出します。ツクシは、スギナという植物の孢子茎で、スギナと地下にある根で繋がっています。ツクシは煮たりして食べられますし、スギナもお茶として有名ですね。スギナは非種子植物といって、一般的な種をつける種子植物とは少し繁殖の仕方が違います。ツクシはスギナが繁殖するためにはならない孢子を形成する働きをするのです。

これから春が本格的に訪れると、草地ではたくさんの種類の花が咲き始めますが、特に目立つのが、黄色い花や白い花です。これには実はある目的があるのですが、ご存知ですか？この色は私たちを楽しませるため…ではなくて、実は昆虫の眼に目立ちやすい色だと言われています。簡単に言うと、昆虫の眼は私たちと全く異なる構造をしているため、見える映像も全く異なったものとなります。当然、色も全く違って見えているのです。その虫の眼に目立ちやすいのが、黄色や白だと言われています。

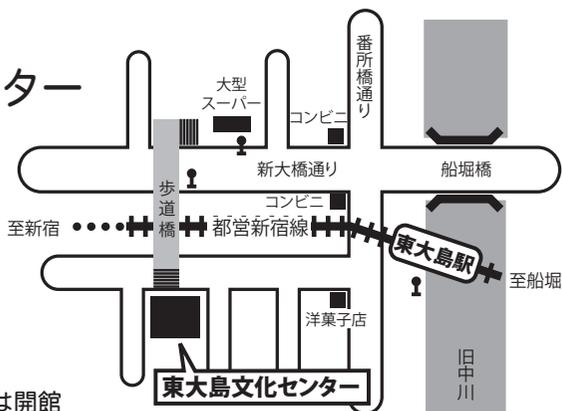
理由はどうあれ、黄色の花が河原にたくさん咲くと人間も春を感じて明るい気持ちになります。そんな景色が、もう少ししたら旧中川沿いにも多く見られるようになります。ワクワクしますね。

春は野草観察にはもってこいの季節です。旧中川沿いにもたくさんの野草が芽を出しますので、たまには足下の自然をじっくり観察してみてくださいね。



公益財団法人  
江東区文化コミュニティ財団  
**江東区東大島文化センター**  
電話 03(3681)6331  
FAX 03(3636)5825  
〒136-0072  
江東区大島 8-33-9

【交通】都営新宿線「東大島駅」  
大島口より徒歩5分  
【休館日】第1・3月曜日休館  
ただし国民の休日にあたる場合は開館



# 東大島文化センター ニュース



index

page

- ① 春の講座受講生募集
- ② 施設の紹介・カラオケ広場スタート！
- ③ ぶらり小名木川のご案内
- ④ 連載「コラム」

東大島文化センター  
平成28年度  
**春の講座**  
春です！  
新しいこと  
はじめてみませんか？

**受講生募集中!**

募集期間  
3/10(木)～24(木)

新規7講座 / 全14講座

① 水辺から見た江東区  
～人力船で進もう!～



和船



カヌー



ドラゴンボート

② 「ルノワール展」と印象派の絵画

⑤ 火山を学ぶ

③ はじめてのフランス語

⑥ 夏目漱石～文豪の足跡をたどる～

④ 籐クラフトでかご作り  
～手作りの温もり～



⑦ 野菜のコンテナガーデン



講師作品：かごバック  
※定員に達してしない講座は申込期間後も引き続き募集を行います。状況によっては開講を見送る場合があります。

講師作品：缶にペイントしたアンティークプランター (イメージ画像)

講座内容の詳細については別紙「講座総合パンフレット」をご覧ください。

いよいよ4月下旬より  
正式にスタート!

# カラオケ広場のご案内

美術室をカラオケ広場として開放します。

実施日 月2回程度 水曜日

①9:00～13:00 ②13:00～17:00

料金 ①② 各500円

定員 ①② 各8名(先着順)

\*グループの場合は要相談

申込み 東大島文化センター電話または窓口



3月2日のカラオケ広場の様子  
使用機材: party DAM V

★1から★4の順にお手続きください。



まずは、今すぐ  
ご予約を!  
各回先着8名  
まで

当日  
窓口でお手続き  
ください。  
名札を付けて  
美術室へ

お手続きの  
順番に好きな  
歌を入れて  
歌います。  
飲食 OK!

お帰りの際、  
名札を受付に  
返却して終了  
です!

★開催日は東大島文化センター内にポスター掲示・チラシ設置でお知らせいたします!

## 東大島文化センター 施設紹介 part 3

### 和室・茶室

東大島文化センターには、舞台が備え付けの4.5. 5畳の第1和室、舞台がない1.7. 5畳の第2和室、床の間と水屋を備えた茶室があります。和室は交流会・茶話会など多様にご利用いただけます。また、茶室は茶華道のお稽古にご利用可能です。  
・第1和室(定員6名)・第2和室(定員2名)・茶室(定員12名)

ご利用については、お気軽に窓口でご相談ください。

※施設は有料です。施設・時間帯により利用料金が異なります。

今回は、音楽スタジオの紹介です!



第1和室



第2和室



茶室



小名木川リバーガイド倶楽部  
会員 小木曾 淑子

## 「小名木川の朝はあさり舟の売り声で起きて」

深川の高橋を渡つて、それについて左に行くと大工町。その小名木川の水に臨んだ二階屋の入口の格子を明けて、その板敷で、幼ない私が何か音を立て、ると、

『何だね、録かえ……』

かう言つて叔母が驚いたやうな顔をして出て来た。

母の姉で、やさしい芝居好きの叔母だつた。叔母は亭主に早く死なれて、針裁縫などをして獨居してゐた。

『何うしたんだえ?』

私は鮭を二疋ほど持つてゐた。主人の使ひで、此方面に、歳暮の使ひに来た次手に寄つたのであつた。それを聞いて、安心したやうに、又は同情したやうにして、私を上にあげて、チヤホヤして呉れた。長火鉢の傍には、裁縫が置いてあつて、讀さした貸本屋の草双紙が讀さしてあつた。

『川添ひの家』田山花袋 (1917) 博文館



『小名木川』

旧館林藩士の子として明治4年(1872)に生まれた田山花袋は本名・録弥、西南戦争で父を失い10歳で京橋の書店に丁稚として奉公した。15歳の時に一家で上京し英語や西洋文学、漢詩・和歌を学び江見水蔭に師事した。文学誌に投稿しのち『田舎教師』『妻』『蒲団』『生』『縁』『時は過ぎ行く』などの大作を残した。自我の延長として自然主義を捉え、私小説の嚆矢となり田山花袋は島崎藤村とともに自然主義文学の双璧を担い明治・大正にかけて文壇に影響を与えた。

『川添ひの家』は大正6年博文館刊『東京の三十年』に所収。小名木川沿いの叔母の家は幼き丁稚時代の思い出に満ちている。『田舎教師』の史跡は埼玉県羽生市に、群馬県館林市には旧居・記念館が残る。還暦を目前にした59歳で花袋は他界、多磨霊園で眠っている。

二階から眺めた小名木川の朝夕の景色は、今だに私の眼に見えた。通つて行く舟、ギイといふ櫓の音、をりをり帆が大きな屋のやうな影を欄干に漲らした。朝早く、川に臨んだ家々のまだ起きない中から、『あさり!むきみ!』かう叫んで、小さな櫓をあやつつて、ゆたゆたと流に漂ひながらあさり舟が通つて行つた。それをあちこちで呼び留めると、小舟は静かに岸に寄つて来た。舟の中はあさりや蛤で一杯に満されてゐた。叔母はよくそれを呼びとめては、目ざるを持つて行つてそれを買つた。

午後には、蠣殻町から出て高橋に寄つてそして利根川へと出て行く小さな蒸汽がいつも通つて行つた。此の汽船は私にはなつかしかつた。何故なら、それは私達が故郷から乗つて都会へ出て来た汽船であるから……。

『川添ひの家』田山花袋 (1917) 博文館